

戦国武将達に学ぶリーダーの本質と人間力

歴史に^{あらが}諍った
七人の戦国リーダー

第一卷

対人関係に関するスキルと
問題解決に関するスキルを学ぶ

はじめに

戦国時代はその字が示すように、合戦の連続だった。当然、そこには勝者と敗者が生まれる。勝者が生き残り、敗者が歴史から消えていくという弱肉強食そのものの世界が展開されていた。

そして、よくいわれるように、歴史は勝者が書いた勝者の歴史といった側面があることも事実である。勝者が喧伝され、顕彰されればされるほど、敗者が実際以上に^{おとし}貶められているように私には思えてしかたがない。敗者の声を聞き、敗者の果たした歴史的役割にも目を向けたいというのが本書執筆の一つの動機である。

もちろん、敗者なので、なぜ負けたのかといった理由もあるはずで、その武将に何が足りなかったかを解き明かすことも目的の一つになる。これは、現在を生きるわれわれにとっても「他山の石」となるにちがいない。

本書で取り上げる武将は、今川義元・武田勝頼・北条氏政・明智光秀・^{あざい}浅井長政・柴田勝家・真田幸村の7人である。この7人はいずれも、戦国最後の統一の覇者といわれる徳川家康に関係する武将たちだったという共通項がある。特に、今川義元・武田勝頼・北条氏政の3人は密接に関係していた。

周知のように、家康は、8歳から19歳まで、今川義元の人質として、駿府で生活した。しかし、ふつうの人質ではなく、いわば特別待遇の人質だったのである。義元の^{たいげん}軍師太原^{そうふ}崇^{せっさい}学、すなわち雪斎から兵法などの教えを受け、高度な今川文化の環境の中で育っていた。その義元が桶狭間の戦いで織田信長に討たれて、自立したあと、武田信玄と結んで義元の跡をついだ今川氏真を倒すことになるが、今川遺臣を多く家臣団に取り込んでいるのである。

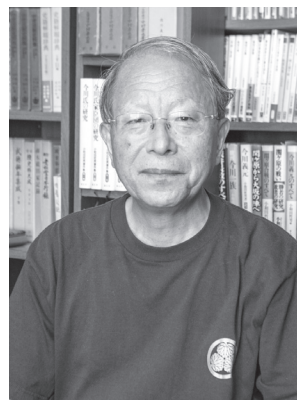
そのことは、武田勝頼・北条氏政についてもいえる。家康は信長と結んで武田氏を滅ぼすが、武田遺臣を家臣団に取り込み、豊臣秀吉が北条氏を滅ぼしたときも、その一員として小田原攻めを行っており、やはり、北条遺臣を家臣団に取り込んでいるのである。いってみれば、徳川家臣団は、三河以来の三河武士団と、今川家臣団、武田家臣団、北条家臣団の混成軍で、敗者の軍事力を自分のものとして戦国を勝ち抜いていったことが明らかである。

それは、単に軍事力に限らない。家康は今川義元・武田勝頼・北条氏政の3人が推進していた進んだ領国経営のノウハウやスキルも自分のものとしていった。それが、家康が戦国最後の統一の覇者になりえた最大の要因と私は考えている。

ここでは主に、今川・武田・北条を例にみたが、これは、他の明智光秀・浅井長政・

柴田勝家・真田幸村にもいえることで、家康は、敗れていったとはいえ、それら武将たちの生きざま、領国経営の先進面などを自己の体制作りによく取り込んでいたのである。

今回、本書で取り上げた7人の武将は、たしかに最終的には「負け組」である。もちろん、なぜ敗者となってしまったかも追いかけるが、単に、反面教師的に失敗の経験に学ぶという視点ではなく、実際にどのように力を発揮していたのかを掘り起こそうと考えている。彼らの生きざまから、現代のわれわれが身につけるべきスキルがあるはずである。



小和田哲男

(おわだ てつお)

文学博士、歴史学者。特に日本の戦国時代に関する研究で知られる。静岡大学名誉教授。

執筆、講演活動のほかに、NHK『歴史秘話ヒストリア』やNHK Eテレ『さかのぼり日本史』などで解説を務める。戦国史と現在のビジネスマンの生き方を比較するような著書や講演も多く行っている。NHK大河ドラマの時代考証も行っており、1996年の『秀吉』、2006年の『功名が辻』、2009年の『天地人』、2011年の『江～姫たちの戦国～』の時代考証を担当した。

目次

第一巻では、登場する人物の人となり、対人関係に関するスキル、組織を形成する、調整・交渉に関するスキルについて、学んでいきます。

第一章

はじめに…………… 2

目次…………… 4

その武将の人となり…………… 7

一．一流の実力を持ちながら一瞬の油断に敗れた、今川義元…………… 8

二．家督を相続するも部下掌握に失敗した、武田勝頼…………… 10

三．関東全域にその勢力を広げた、北条氏政…………… 12

四．織田家臣団の中で出世頭だった、明智光秀…………… 14

五．信長と絶対の信頼関係にあったが謀反に及んだ、浅井長政…………… 16

六．自分の眼力で主君を選び力を発揮した、柴田勝家…………… 18

七．長く不遇に耐えた末に力を存分に発揮した、真田幸村…………… 20

対人関係に関するスキルを学ぶ…………… 23

第二章

一．《組織を形成する力 その一》
武田家の強固な軍団の形成と組織の崩壊…………… 24

二．《組織を形成する力 その二》
緻密に構築されていた北条氏の組織…………… 26

三．《組織を形成する力 その三》
物語のごとく忍者を有効に利用していた真田氏…………… 28

四．《組織を形成する力 その四》 仲間の中から推される形で力を得ていった、浅井氏 ……………	30
五．《組織を形成する力 その五》 段階的な支配で、大きな組織を形作った、今川氏 ……………	32
六．《組織を形成する力 その六》 個々の力を活用して組織化した、柴田勝家 ……………	34
七．《組織を形成する力 その七》 直臣団に、新たな武将たちを組み込んでいった、明智光秀 ……	36
八．《調整力・交渉力 その一》 常に北条と武田を見据えた交渉を行ってきた、今川義元…………	38
九．《調整力・交渉力 その二》 武田信玄と上杉謙信の仲裁をかって出た、今川義元…………	40
十．《調整力・交渉力 その三》 情勢を見て同盟の相手を選んだ、北条氏政…………	42
十一．《調整力・交渉力 その四》 同盟という名の作戦を多用した、武田勝頼…………	44
十二．《調整力・交渉力 その五》 信長と浅井長政同盟関係の真実…………	46
十三．《調整力・交渉力 その六》 信長を窮地に追い込んだ浅井長政の交渉力…………	48
十四．《リーダーシップ》 信長に対して互角以上に戦っていた、浅井長政…………	50
十五．《宣伝力》 信長の一大軍事パレードの総指揮を務め上げた、明智光秀…………	52

- 十六．《人間関係構築力 その一》
公家の力、高僧の知恵を味方につけのしあがった、今川義元…… **54**
- 十七．《人間関係構築力 その二》
武勇があり、先見の明もあったが、人間関係で成功しなかった
柴田勝家…… **56**
- 十八．《人格》
旧来の秩序を守り通そうとした人格者、浅井長政…………… **58**
- 十九．《状況対応力》
情勢を見極めながら行動し、関東をほぼ掌握した、北条氏政…… **60**
- 二十．《部下との良好な関係 その一》
優秀な明智光秀という部下の扱いを間違えた？ 信長…………… **62**
- 二十一．《部下との良好な関係 その二》
主人信長の悪いところに目をつぶれなかった、明智光秀…………… **64**
- 二十二．《交渉力》
徳川秀忠率いる大軍を策を弄して撃退した真田昌幸、幸村親子… **66**
- 二十三．《ホスピタリティマインド》
貴族をもてなす心を持ち、文化を高めた、今川義元…………… **68**
- 二十四．《伝達力》
二人の主君を持ち、それをうまく活用した、明智光秀…………… **70**
- 二十五．《品格》
威厳と品格と領民に対するやさしさを兼ね備えた、今川義元…… **72**
- 二十六．《プレゼンテーション力》
大坂冬の陣で賛同が得られず、大胆な作戦に出た、真田幸村…… **74**
- 二十七．《判断力・決断力》
もっとも有効なタイミングで信長に謀反を起こした、明智光秀… **76**
- 二十八．《説得力》
頻繁で正確な部下への連絡で領地を守った、武田勝頼…………… **78**

第一章

その武将の人となり

まずは、本コースのメインの登場人物として
とりあげていく七人の武将について
人物像を解説していきます。

- 一．今川義元
- 二．武田勝頼
- 三．北条氏政
- 四．明智光秀
- 五．浅井長政
- 六．柴田勝家
- 七．真田幸村

一

一流の実力を持ちながら、一瞬の油断に敗れた、今川義元

◆建仁寺

(第三巻 P25 参照)

◆妙心寺

京都市右京区花園にある臨濟宗妙心寺派大本山。花園上皇により、建武2年(1335)開山された。

◎^{げんこうえんたん}玄広恵探 ◆^{はなくら}花蔵の乱

玄広恵探(1517～1536)は、今川氏親の子。今川義元の異母兄。早くに出家して花倉の遍照光寺(静岡県藤枝市)の住持となっていた。天文5年(1536年)、今川家当主氏輝と弟の彦五郎が相次いで急死したため、氏親の正室であった寿桂尼の子の梅岳承芳が還俗して、今川義元を名乗り家督を継承しようとした。これに対して、恵探は母方の福島氏にかつがれ挙兵。義元に敗れ自害。この戦いが花蔵の乱と呼ばれる。

◆善得寺

(第三巻 P09 参照)

◎^{たいげんそうふ}太原崇孚 (雪斎)

(1496～1555)

駿河の善得寺、京都の建仁寺で修行。秀才として名高く、今川氏親から仕えるよう要請され、氏親の五男・芳菊丸(のち義元)の教育係になる。ともに建仁寺、妙心寺で修業。善得寺に戻る。雪斎は駿府臨濟寺の住持として、宗教的な影響力を持ちながら、今川氏の執政、軍師としての役割を担う。政治・軍事・外交面、すべてにおいて義元を補佐した。

今川義元は、駿河・遠江二カ国を領有していた戦国大名今川氏親の五男として永正16年(1519)に生まれている。幼少のときから寺に入れられたが、その養育係となつたのが^{たいげんそうふ}太原崇孚という禅僧であった。^{せつさい}雪斎という名で知られている。

雪斎にともなわれ、京都の建仁寺さらに妙心寺で修行していたが、氏親の跡をついでいた兄の氏輝の要請で駿河にもどり、富士郡の善得寺で修行を続けていたとき、大きな転機が訪れた。天文5年(1536)、家督をついでいた氏輝が突然死んでしまったのである。氏輝には子どもがいなかったため、弟たちの中から後継者を決めなければならなくなった。

このとき、後継候補として浮上してきたのが三男の玄^{げん}広^{こう}恵^{えん}探^{たん}と、五男で当時^{せんがくしやうほう}梅岳承芳^{せんがくしやうほう}といっていた後の義元の二人だった。この兄弟二人の家督争いは「^{はなくら}花蔵の乱」とよばれているが、結局、弟義元が勝利し、今川家の家督をついでいる。そのとき、義元は、自分の養育係だった雪斎を軍師として迎え、この義元・雪斎コンビにより、今川氏は領国を三河にまで広げ、義元は、駿河・遠江・三河の三カ国を領し、「海道一の弓取り」などとも評されたのである。

義元之母で、氏親の正室だった^{じゅけいに}寿桂尼^{なかと}が京都の公家中御門家の出身だったこともあり、その縁故によって、京都の公家たちが多数駿府に下向してきた。和歌の第一人者^{れいぜいためかず}冷泉為和、蹴鞠の第一人者^{あすかいまさつな}飛鳥井雅綱といった文化人が京風の公家文化を伝えている。ここに、戦国三大文化といわれる駿府今川文化の花が開く形となった。

駿河には安倍金山、富士金山などいくつかの金山があ

※旧国名は、第三巻 P06-07 を参照してください。

り、その産金収入と、京都との交易にも力を入れ、そうした財力が今川文化を支えたわけであるが、戦国武将としての義元の力量も高く、武田信玄と上杉謙信が信濃の川中島を舞台に5回戦っている内の第2回戦は、義元が間に入って戦いをやめさせていたことが知られている。

義元は、信玄・謙信とほぼ対等な力をもっていたのである。

ところが、永禄3年(1560)5月19日、義元は、尾張の桶狭間で織田信長の奇襲を受け、首を取られてしまう。このときの尾張侵攻については、従来、義元の上洛戦として位置づけられていた。しかし、各種史料を総合すると、義元にまだ上洛の意志はなく、尾張一国の奪取がねらいだったと考えられている。

この桶狭間の戦いは明らかに義元の油断が原因だった。義元はこのとき2万5000の大軍で尾張に攻め入っているが、これは今川氏の最大動員兵力である。しかもこのとき、義元は馬ではなく塗輿ぬりこしに乗って出陣していた。当時、塗輿には誰でも乗れるというものではなく、足利将軍家から特別に許可されていた者に限られていた。義元はその特権を尾張の田舎大名信長に見せつけるため塗輿で出陣したわけであるが、かえって、そのことが、信長奇襲の格好の標的とされてしまったのである。

以後、今川氏は、義元の子氏真うじまねが国を支えることができず、東から信玄、西から家康に攻められ滅亡していくことになる。

◆川中島の合戦

北信濃一帯で5回にわたって行われているが、最大の激戦である第四回日の戦いが千曲川と犀川が合流する川中島で行われたので、そう総称されている。

第一回 天文22年(1553年)

第二回 弘治元年(1555年)

第三回 弘治3年(1557年)

第四回 永禄4年(1561年)

第五回 永禄7年(1564年)

◆桶狭間

(第三巻 P14 参照)

◆塗輿ぬりこし

公方らを使う、箱を漆塗りにしてある輿。鎌倉時代末から略儀に用いられていた。

◎今川氏真うじまね

(1538～1614)

父義元が桶狭間の戦いで織田信長によって討たれ後、家督をついだが、武田信玄と徳川家康の侵攻を受けて敗れ、戦国大名としての今川家は滅亡した。その後、家康の庇護を受けている。

教訓

- たとえ実力を持った者であったとしても、ふとした油断から身を滅ぼすことがある。油断大敵である。



今川義元

一
一家督を相続するも部下掌握に
失敗した、武田勝頼

◎武田信玄

(1521～1573)

甲斐の戦国大名、武田信虎の子。
16歳で元服し晴信（はるのぶ）
となる。のち出家して信玄と名
のる。

◎諏訪頼重

(？～1542)

信濃国の戦国大名。諏訪氏の第
19代当主。諏訪大社の大祝職
でもあった。武田信玄の妹・禰々
（ねね）を妻にとるが、信玄に
攻められ、甲府にて切腹。

◆高遠城

(第三巻P19参照)

※人物の相関家系図は、第二巻
P76～77を参照してください。

武田勝頼は、天文15年(1546)、武田信玄の四男として生まれている。母は信玄に滅ぼされた諏訪頼重の娘である。名前が伝わらないため諏訪御料人（御寮人）といわれている。

武田勝頼という名前が一般的なので、勝頼ははじめから武田を名乗っていたと思っている人が多いようであるが、武田家の相続が決まるまでは諏訪四郎勝頼と称している。永禄5年(1562)に、諏訪頼重の跡をつぐ形で信濃の伊那郡代に任じられ、17歳で高遠城主となっている。

その段階では、兄の義信が武田家の家督をつぐものとみられていたので、あくまで、武田領国の西のはずれを担当する形であった。武田氏の通字である“信”の字を与えられておらず、勝頼と名乗ったことをみても、信玄として、そんなに重視する存在ではなかったことがわかる。

ところが、それからわずか3年後の永禄8年(1565)、勝頼にとって思わぬ展開となった。兄義信と父信玄の不和から、義信が幽閉されるという事態となり、しかも、勝頼は織田信長の養女を娶ることとなったのである。これは、父信玄の路線転換によるもので、今川義元が桶狭間の戦いで信長に討たれたあと、今川氏との同盟にメリットを感じなくなった信玄が信長との同盟に動いたことから生じたものであった。

今川義元の娘を娶っていた義信は、信玄のこの路線転換に反対し、かえってはいちゃく廢嫡されてしまったのである。信玄には二男りゅうほう龍宝、三男信之がいたが、龍宝は盲目、信之は早世してしまっていたため、四男ながら勝頼が家督候補として浮上してきたことになる。

しかし、どうしたわけか、信玄は勝頼を甲斐の躑躅ヶ崎館つっじがさきに呼びよせることをせず、高遠城主のままに置かれており、ようやく元亀2年(1571)に、躑躅ヶ崎館つっじがさきに迎えられている。これによって、周囲も勝頼が後継者として認識しはじめることになった。

勝頼の初陣がいつのことかはっきりしないが、少なくとも永禄12年(1569)の信玄による武蔵諸城攻撃のときには従軍しており、『甲陽軍鑑』によると、勝頼は北条氏照の守る滝山城攻めの大將となり、三の曲輪を攻め、氏照の家老諸岡山城もろおかと槍を合わせたとしている。

ただ、注意しなければならないのは、『甲陽軍鑑』はどうしても信玄賛美の記述に偏りがちで、その対極として、勝頼は思慮に欠け、武力だけの猪突猛進型の武将に描かれる傾向にある。実像とはかなりちがっていたのではないかと思われる。

信玄が天正元年(1573)4月12日に死に、いよいよ勝頼が武田軍団を率いることになった。しかし、そこで新たな問題も起こっている。信玄に仕えていた重臣たちと、勝頼に仕えていた高遠時代の家臣たちとの軋轢あつれきである。この問題を抱えたまま迎えたのが同3年(1575)5月21日の長篠・設楽原の戦いながしの したらがはらであった。

結局、この戦いで、信玄以来の重臣山県昌景・馬場信房らが討ち死にし、武田家は衰退に向かい、ついに、同10年(1582)3月11日、天目山麓たのの田野で自刃し、武田氏は滅亡するのである。

◆躑躅ヶ崎館つっじがさき

(第三巻 P10 参照)

◆『甲陽軍鑑』

1575年から1577年にかけて武田家臣である春日虎綱(高坂昌信)によってまとめられ、その後も加筆された、武田氏の戦略・戦術を記した軍学書である。武田信玄・勝頼らの合戦記事、軍法、刑法などを記している。

◆長篠・設楽原の戦いながしの したらがはら

勝頼が、徳川家康の長篠城を攻めたことから戦いが始まる。織田信長・徳川家康連合軍3万8000と武田勝頼軍1万5000との間で勃発。織田・徳川軍が大量の鉄砲を活用した戦い。これを機に武田家は衰退。

◆天目山

(第三巻 P11 参照)

教訓

- 本人に事を成す力量があったとしても、周囲の助けがなければ思うように事は運ばないものである。



武田勝頼

二

関東全域にその勢力を広げた
北条氏政

◆小田原城
(第三巻 P16 参照)

◆こうそうすん甲相駿三国同盟
甲斐の武田氏、相模の北条氏、
駿河の今川氏による同盟。

◆おたて御館の乱
1578年3月13日に上杉謙信
が急死。謙信には実施がなく、
上杉家の家督をめぐって養子の
景勝(実父は長尾政景)と景虎
(実父は氏康)とが争った。越
後を二分した内乱は景勝が勝利
し家督を継いだ。

北条氏政は北条氏康の二男として天文7年(1538)に生まれている。二男だったが家督をついだのは、兄の新九郎が早世したためであった。兄の死後、けみょう仮名の新九郎をそのまま継承している。

天文22年(1553)正月、こうそうすん甲相駿三国同盟の一環として、武田信玄の娘との婚約が成り、翌年12月、結婚し、そのころから政治見習いの形であるが、文書発給もみられるようになる。

注目されるのは、永禄2年(1559)12月に父氏康から家督を譲られている点である。氏康はこのとき45歳で、まだ働き盛りとってよく、氏政は22歳の若さだった。氏康としては、早く家督を譲り、むしろ後見する形をとりながら氏政を一人前の武将に育てあげようとしたのかもしれない。

家督をついで直後の同4年(1561)、上杉謙信に小田原城を攻められている。このとき氏政は小田原城に籠城して上杉軍を撃退しており、同12年(1569)には武田信玄に小田原城を攻められたが、このときも撃退に成功している。この謙信・信玄という戦国を代表する名将を、小田原城に拠って撃退したことが、小田原城に対する過信につながってしまったのかもしれない。

外交面ではやや迷走した感もある。信玄の娘を娶った段階では甲相駿三国同盟を結んだわけであるが、その後、信玄が今川氏真を攻めたときに断交し、妻を信玄に送り返し、信玄の対抗勢力である上杉謙信との「えっそう越相同盟」に踏みきっている。このとき、人質として謙信のもとに送られたのが氏政の弟三郎で、三郎は謙信に気に入られ、養子となり景虎と名乗った。おたて御館の乱のとき、景勝と上

杉の家督を争ったのはこの三郎景虎である。しかし、父氏康の死後、氏康の遺言に従い謙信とは手を切り、再び信玄と結んでいる。

この氏政のとき、武蔵の一円支配をなしとげ、下野にも進出し、北条氏としての最大版図を確保することに成功した。徳川家康とも盟約を結び、織田信長とも良好な関係を保ち、いわゆる「関八州国家」を築きあげている。

天正8年(1580)、氏政は家督を子の氏直に譲っている。しかし、このとき氏直はまだ19歳で、隠居とはいっても、それはあくまで形だけのことで、実権は氏政が握るという形であった。

2年後の信長による武田攻めのとき、氏政・氏直父子は、信長軍の一員として関東口から甲斐に攻め入るはずとなっていたが、軍事行動を起こす前に武田氏が滅亡してしまったためこれといった貢献がなかった。そこで、信長の歓心をかうため、信長の好きな鷹などを贈っている。

その信長が本能寺の変で明智光秀に討たれたあと、氏政はそれまでの織田従属路線を転換し、信長家臣として関東管領となっていた滝川一益かんなの戦いで破り、そのあと浮上してきた豊臣秀吉とは対決の姿勢を貫いているのである。

その結果、天正18年(1590)の秀吉による小田原攻めを迎え、氏政は、かつて上杉謙信および武田信玄を撃退した栄光の歴史を取りもどそうと、小田原城に籠城する作戦をとったわけであるが、秀吉の21万とも22万ともいう大軍の前に歯がたたず、結局、降伏し、氏政はその責任をとる形で自刃じじんしているのである。

◎上杉景勝

(1556～1623)

長尾政景の子。上杉謙信の養子となり、御館の乱を経て、謙信の跡を継ぐ。後、会津に移封となり120万石の大名になる。関ヶ原の戦いの際に西軍につき、会津領を没収され、米沢30万石に転封される。

◎北条氏直うじなお

(1562～1591)

氏政の子で氏政が引退して家督をついでいる。秀吉の度重なる上洛命令を拒否。北条攻めとなった。やぶれた後、高野山に蟄居。

◆関東管領

室町幕府が、関東を治めるための鎌倉府をおいた。その長官の鎌倉公方を補佐するためにおいた役職。上杉家が世襲していた。

◎滝川一益

(1525～1586)

信長に仕え、武田攻めでは、信忠の副将的役割もつとめる。上野の厩橋城にいて本能寺の変を知る。この時天正10年(1582)6月、北条氏直と戦ったのが神流川の戦い。一益は氏直に敗れ、清洲会議に間に合わず、織田家の宿老からはずれてしまった。

教訓

●過去の成功を過信すると、その成功が後々かえってあだとなる。



北条氏政

四

織田家臣団の中で出世頭だった 明智光秀

◆『明智軍記』

元禄期に成立したと言われる明智光秀の伝記。

◆美濃源氏土岐氏

清和源氏の流れを組み、美濃国土岐郡を領地とした一族。

◆明智城

(第三巻 P18 参照)

◎斎藤道三

(1494～1556) 謀略を駆使して、美濃の国主にまでなった。

◎斎藤義龍

(1548～1573)
斎藤道三より家督を継承して稲葉山城主となる。隠居していた道三と不和となり、長良川の戦いで道三を敗死させている。

◎朝倉義景

(1533～1573)
越前の戦国大名。加賀南部、丹後まで勢力を伸ばすが、姉川の合戦に織田・徳川連合軍に敗れ衰退。その後信長に攻められ敗れ、一族の者に裏切られ自害。

◎足利義昭

(1537～1597)
室町幕府第12代将軍義晴よしかはるの二男。第15代征夷大将軍。

◆(丹波) 亀山城

(第三巻 P25 参照)

明智光秀の場合、厳密にいうと生年不詳である。ただ、史料としての信憑性は低いが、光秀の伝記史料『明智軍記』に享禄元年(1528)の生まれとしており、人名辞典などではこの説を採用しているものもある。

父親の名前も光綱としたり光隆としたりいろいろで、出身地についても諸説あるが、私は美濃源氏土岐とぎ氏の一族で、美濃国明智荘の明智氏とみている。現在、岐阜県かに可児市に明智城址があり、その生まれではなかろうか。

斎藤道三が子義龍と戦った長良川の戦いのとき、道三方だった光秀の父は義龍の軍勢に攻められ、光秀は城を捨てて各地を流浪した末、越前の朝倉義景に仕えていた。その義景のもとに足利義昭りゅうこうが流寓してきたことによって光秀の運は開けた。

朝倉義景には足利義昭を連れて上洛するだけの覇気がなく、それを知った光秀が義昭に織田信長に頼ることを勧め、光秀がその橋渡し役をつとめるようになったのである。結局、義昭は岐阜の信長に迎えられ、あわせて光秀も信長のもとに来ることになった。光秀ははじめの内、義昭と信長の二人に両属する形だった。

このように、光秀は織田家臣団の中では「中途入社組」で新参者であったが、信長による能力本位の人材抜擢によってみるみる出世し、早くも元亀2年(1571)には近江坂本城主となっている。これは、織田家臣団の中で「一国一城の主」となった第1号である。

このあと、京都の近くでありながら敵対勢力の多い丹波の経略をまかされ、亀山城主にもなり、破格の好待遇を受けている。おそらく、光秀にとって最大のライバルと思っていたのが羽柴秀吉で、秀吉との熾烈なライバル

争いが展開することになった。秀吉の「中国方面軍司令官」に対し、光秀は「近畿管領」といういわれ方をして、甲乙つけがたい働きをしていた。

天正9年(1581)2月28日、有名な京都馬揃えが行われた。これは、織田軍団の威容を天皇および京都の町衆たちにみせつける軍事パレードで、その宰領をまかされたのが光秀だったのである。光秀としては、「これで秀吉に勝った」と思ったのではなかろうか。

ところが、翌年5月になって、光秀は信長から秀吉の応援に行くよう命令を受けた。「応援に行け」ということは、「秀吉の下につけ」ということである。それまでの熾烈なライバル争いで秀吉に勝ったと思っていた光秀にとってはこれは相当なショックだったと思われる。

天正10年(1582)6月2日の本能寺の変について、光秀が謀反を起こした動機が何だったかについては、怨恨説、天下取りの野望説、朝廷黒幕説等々、さまざまな説がだされているが、私はこのときの「秀吉の応援に行け」といわれたショックがかなりの比重を占めていたのではないかと考えている。

信長を討ったあと、対朝廷工作はそつなく進めた光秀であったが、与力大名だった細川藤孝・高山右近・中川清秀・筒井順慶らの助力を得られず、秀吉と戦った山崎の戦いに敗れ、敗走するところを討たれてしまったのである。

◆坂本城

(第三巻 P21 参照)

◆本能寺

(第三巻 P24 参照)

教訓

- 優秀な人材を使う時の上司としては、その彼の気持ちを察してやることも必要である。忠実であると、たかをくくっていると裏切られる。
- 自分の計画を実行するにあたり、協力者に対して根回しをしておかないと、思わぬところで足をひっぱられることがある。



明智光秀